

日本伝統工芸展岡山展関連事業

特別展示

「もっと伝統工芸 技と美の出会い」^{しま} 縞

会期：平成24年11月14日(水)～12月9日(日)

日本伝統工芸展に合わせて開催している特別展示、今年は「縞」を取り上げます。直線を平行に並べた「縞」は室町以降の舶来品に由来した呼び名で、「島もの」という意味もあり、中国やインドからもたらされた裂は、仕覆などに仕立てられ今日に遣ります。「縞」は粋でおしゃれな着物の柄として、江戸時代中期以降広く庶民にも浸透し、さまざまな縞文様が生み出されました。明治から大正期に一世を風靡した竹久夢二も「縞」には思い入れが深く、「縞」を身につけた女性を数多く描き、古裂の蒐集家でもありました。

現在、染織部門で県内唯一の日本工芸会正会員である佐藤常子は、身近な草花で糸を染め、機を織り、主に「縞」による作品づくりに取り組んでいます。短歌に親しむ佐藤は、作品に歌の詩情を織り込むことで、制約の多い「縞」を自然の情景や四季の移ろいを喚起させる情感豊かなものとして具現しています。

特別展示では、伝統の中で長く日本人に愛されてきた「縞」の作例と夢二の作品、佐藤が創出する現代の「縞」から、時代を超えて豊かに展開する「縞」の魅力をご紹介します。 【主任学芸員 福富幸】



佐藤常子 絵織着物《雪の沢》(部分) 2004年 個人蔵



竹久夢二 《婦人グラフ》第3巻第5号 表紙絵 1926年 夢二郷土美術館蔵

刊行物のご案内

①「岡山県立美術館紀要第4号」

目次 鍵岡正謹…原田直次郎一新出書簡など五つのこと—
古川文字…<作品紹介>野崎家コレクションより
—王冶梅「四季山水図」・橋本青江「董法山水養蚕紡絲之図」—
廣瀬就久…特集展示「緑川洋一の写真」解説文集成

■県内の図書館および、全国の主要美術館に配布 ■販売はしていません

②「平成23年度岡山県立美術館年報」

■県内の図書館および、全国の主要美術館に配布 ■販売はしていません



平成24年度 展覧会スケジュール(9月～12月)

特 別 展	自由になれるとき—現代美術はこんなにおもしろい!	9月27日(木)～11月4日(日)
	第59回日本伝統工芸展岡山展	11月22日(木)～12月9日(日)
	生誕100年 塩出英雄展	12月21日(金)～2013年1月27日(日)
岡山的美術展	山崎治雄の写真 第3回 美作路	9月5日(水)～10月8日(月+祝)
	山崎治雄の写真 第4回 吉備路	10月10日(水)～11月11日(日)
	もっと伝統工芸 技と美の出会い 縞	11月14日(水)～12月9日(日)
	岡野耕三展	12月14日(金)～2013年1月27日(日)
	伊勢崎満 回顧展	12月14日(金)～2013年1月27日(日)

編集後記

美術館ニュース98号をお届けします。暑さも弱まりお出掛けしやすい季節になりました。9月27日から11月4日まで開催の現代美術展では毎週末イベントを開催します。このイベントでは現代美術についてわかりやすく、より楽しんでいただけるプログラムを用意しております。作家によるトークやパフォーマンス、ライブドローイングなど、作品を観るだけではわからない部分を知ること面白さが倍増すること間違いなしです。 【o.m.】

美術館ニュース 第98号

発行：2012年9月

発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL：086-225-4800
Email：kenbi@pref.okayama.lg.jp

「自由になれるとき—現代美術はこんなにおもしろい!」

2012年9月27日(木)～11月4日(日)



唐突な話で恐縮だが、「現代美術」と私の出会いについて書きたい。というのも、それが奇しくも岡山でのことだからだ—20年近く前、高校の修学旅行で東京から訪れた時に立ち寄った大原美術館でのことである。その頃は二十世紀初頭の絵画や宗教画が好きで、学校の図書室にある美術書を訳もわからず読んでいた。そんな時期に、倉敷でウォーホルの《マリリン・モンロー》に遭遇したのだった。当時受けたショックはなかなかで、その直後に移動先の京都の丸善にてウォーホルの画集を買い、翌日には当時まだ万博公園にあった国立国際美術館でネオ・ダダの二人展を鑑賞、現代美術に対する関心を一気に高め、こうしてその後の人生が大きく左右されたと思っている。

なぜ、そのような美術に突然惹かれたのか。それは、単純に「全くワケが分らなかった」からに他ならなかった、と思っている。当時好んでいた美術はどこかの風景や人物を描いたもので、特に宗教画などは図像学事典を片手に観れば絵画の意味が概ね分かるからこそ面白いと思っていた。しかし、ここで遭遇した「現代美術」はそういう類のものに全く思えなかった。もちろん後日、この絵はモンローの死の直後に描かれ…などという時代背景や作家の意図を知ることになるのだが、当時それは突然放り投げ込まれた石のように、自分の中では限りなく異物で、消化しきれない。しかしだからこそ限りなく魅力的な、もっと知りたいと思わせる対象となったのではないだろうか。

あれから20年弱、その分野に惹かれ続けて思うのは、現代美術の魅力はそういうところだ、ということだ—言われるままに観賞してすべてが解るのではなく、解らないなりにまずはその表現を受け入れ、そうして自分で考える。ひょっとしたら答えなどないのかも知れない。なぜならそれはこの時代そのものであり、何物でもありうるからだ。もちろんその歴史や社会状況、当時の潮流を多少なりとも知る必要があるが、ルールを知らなければ楽しめないのはスポーツやゲームと一緒にだろう。一番重要なのは、あなたが現代美術を好きでないとしたら、それはただ単に、好きになれる現代美術がどこかにあるはずなのにそれに会っていない、それだけのことなのだ。

今回の展覧会は、日本でも屈指の20世紀美術を収蔵する高松市美術館のコレクションを中心に、当館ならではの個性的な作家を加え、様々な現代美術の在り方を紹介している。まずは、美術の多様性を知ってほしい。そしてそこに、言葉に出来ない魅力を醸し出す作品を一つでも見つけて頂ければ、担当者冥利に尽きる。

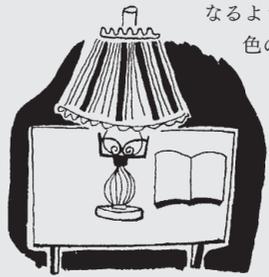
【学芸員 高嶋雄一郎】

自由になれるとき



松岡寿 《父の像(松岡隣)》

夜長随想



松岡寿 まつおか ひさし

松岡寿(二八六二―一九四四)は、岡山藩家老伊木氏の家臣であった松岡隣(二八二〇―一八九八)の次男として、岡山に生まれました。父と上京し、父と父の友人西岡夫妻からの勧めで西洋画法を学びます。そして一八七六年には、日本最初の官営美術学校である、工部美術学校に入学しました。ここでイタリア人教師フオントネージから、西洋画法の指導を受けます。その後一八八〇年から一八八五年までイタリアに留学し、王立ローマ美術学校を卒業しました。この作品は帰国後に描かれた父の肖像

《父の像(松岡隣)》 明治三年(一八八九) 油彩、カンバス

山崎治雄の写真 第4回 吉備路

10月10日【水】
↓
11月11日【日】

父が喜寿を迎えた年に描かれました。幕末に洋学を志し、教育者としても活動しましたが、この頃はすでに公職を辞し、閑居読書の日々を送っていたと言われています。威厳のある髪を少しも穏和な表情です。四分の三面観から、眼の周りの隈や眉間の皺など、身体的な特徴を丹念に把握しています。

【学芸員 廣瀬就久】

ショーヴェ洞窟壁画に驚愕した。ヘルツォーク監督の稀有なドキュメンタリー3D映画「世界最古の洞窟壁画 忘れられた夢の記憶」を三月末、東京有楽町・東宝シネマズ日劇のレイトショーで見た。3D映画は初体験、黒い眼鏡をかける。(小学生の頃、ポー原作「モルグ街の殺人」が立体映画と称され、色つきゼロハン・メガネをつけて見た。画面からオラン・ウータンが飛び出す場面を覚えている。あれは稚拙な3Dの始まりなのか。)

フランスはローヌ川支流アルデシュ川の神秘に満ちた峡谷をたどるとショーヴェ洞窟がある。1994年に発見され、その名を冠した洞窟の前を大岩石が落下し立ち塞ぎ、タイムカプセルとなって奇蹟的に壁画が残った。なんと三万二千年前と認められている。

私たちが知るラスコー壁画は一万五千年前で、さらに一万七千年を遡る最古の洞窟壁画である。気が遠くなる遙かな長い長い昔の時代、人類生誕から猿人・原人を経て、私たちが知るネアンデルタールの旧人(古型ホモ・サピエンス)からさらに下り、四万年ほど前に私たち現代人と同じ人類の新人(新型ホモ・サピエンス)が出て、洞窟に壁画を描いていたのだ。

3Dカメラが石筍のたつ鍾乳洞を奥へ奥へとたどると、優雅にさえみえているウマの群れが岩壁に描かれている。奥の壁にはウシ・シカ・サイらが凸凹の壁面を生かしながら、吹き墨をつかい、重なるように線描きやときに面に生き生きと描かれている。「新人の手形」もある。手を壁に当て、赤色の顔料で吹きつけられている。私たちと同じ手の形で、あの動物たちを描いていたのだ。

三次元を浮漂する3D映画には四次元を超える世界が映されているようで、誰かがホモ・サピエンスというよりホモ・スピリチュアルだ、と言っている。

七月末に、岡山は美術館に近いシネマ・クレール丸の内で、3D映画ではないが同映画が放映されていて見た。たちまち三万二千年前の時空へ連れ去られ、ショーヴェ洞窟の壁画にいま描かれたばかりにみえる動物たちと再会した。

私たちの先祖「新人」は出現したはじまりに、絵を描いているのである。

【館長 鍵岡正謹】

岡山市に生まれ、戦後はドキュメンタリー写真に進んだ山崎治雄(1908―1987)を紹介する特別展示は、第4回目に吉備路の写真を取り上げます。

山崎治雄は備前、備中のみならず、美作、備後を含めた地域を「吉備路」としてまとめていました。これは古代の吉備国に通じます。非常に多数の作品が含まれていますので、第3回目の展示(2012年9月5日【水】―10月8日【月・祝】)では、「美作路」として、美作を撮影した作品を紹介しました。今回の展示では、岡山市一宮から総社市に通じる古代山陽道に沿った、いわゆる狭義の吉備路を撮影した作品を取り上げます。このなかには、吉備津神社や多くの遺跡が含まれます。



【学芸員 廣瀬就久】

「倉敷市福築遺跡」

夏の特別展「マルク・シャガールー愛をめぐる追想」 関連ワークショップ レポート

MARC CHAGALL

今夏の特別展関連ワークショップは、学校と美術館の連携事業2本、こんには美術館事業^(※1)2本の計4本を開催した。学校と美術館の連携事業としては、授業の中で取り組んでもらうことで、児童・生徒を展覧会に誘うことを目的とした「モバイル:あなたの愛おしいもの」、そして小学生が美術館と出会うきっかけづくり、ならびに、先生が美術館の活用法や鑑賞法について研修することを目的とした、岡山市内の小学校の先生方と協働で行っている「小学生鑑賞教室」である。こんには美術館事業としては、より幅広い年齢層に気軽にシャガール作品に親んでもらうことを目的とした「ミニ・ブーケをつくろう」、そして特定の年齢層(中学生以上)を対象とし、表現技法を実体験することでシャガール作品にせまることを目的とした「アート

の錬金術・リトグラフ」である。学校と美術館の連携事業「モバイル:あなたの愛おしいもの」は、昨年度実施の「京都 細見美術館 琳派・若沖と雅の世界」関連事業「琳派風扇面図屏風をつくろう」に引き続き2年目の実施となる。2年連続の参加校も含め、26校561作品が集まった。シャガールが永遠のテーマとした“愛”とともに、“今を生きる小・中学生の561の愛”がモバイルとなって空中で揺らめき、展覧会会期中、会場を温かなムードで包み込んでいる。また、参加校の中には、展覧会オープンと同時に美術館へ来館し、児童が自分の作品とシャガールの作品を、美術館という場で鑑賞体験する機会をコーディネートした学校もあった。

「小学生鑑賞教室」は、今年で8回目を迎える息の長い学校との連携事業である。8月3日(金)開催の教員向け事前研修会には、岡山市内の小学校教員が31人参加した。対話を用いた鑑賞を軸に鑑賞教室のプログラムが設計されているので、研修はワークショップ形式を取り入れながらも、理論を含めたレクチャーを適宜取り入れた。鑑賞教室当日は、5年生30人、6年生21人が参加し「愛の画家 マルク・シャガール 鑑賞コース」と「土と炎の芸術 備前焼コース」にわかれて楽しんだ。特に「土と炎の芸術 備前焼コース」は、県内の小学生が4年時に、地域の伝統工芸という分野で全員が学習をしていること、また当館で制作した「アート・トラベリング・トランク^(※2)」にも素材が入っていることを受け、工芸担当学芸員が、夏休みで来館の児童・生徒に親しみやすい備前焼展示を工夫した。地道に行っている学校との連携事業が、少しずつ実を結んでいることを実感できるものであった。

こんには美術館事業「ミニ・ブーケをつくろう」は、バラと季節のグリーンを使って、ミニ・ブーケをつくるワークショップである。アトリエ・ユミエール主宰の土光まり氏を講師に迎え、シャガールの絵画にある花束をイメージしながら、植物を使って動きやニュアンスをだし、愛情膨らむミニ・ブーケづくりに挑戦した。参加者は幼児から大人までの幅広い年齢層42人となり、個人での参加はもとよりファミリー参加も見受けられ、会場は花の香りが漂うなごやかな雰囲気にも包まれた。

「アートの錬金術・リトグラフ」は、秀art studio所属・版画家の岡村勇佑氏を講師に迎え、展示作品であるシャガールの版画集「ダフニスとクロエ」を鑑賞することでリトグラフの特性に気づき、実際にリトグラフの制作工程を体験することで難解なリトグラフを知るというワークショップである。複雑な制作行程があるリトグラフなので、定員を絞り11名の少人数ワークショップとした。会場は、理科の実験室さながらの光景と薬品の臭いに満ちた雰囲気となった。

来館者が多い夏の特別展関連事業として、参加対象や目的の異なる4本のワークショップを実施することで、地道ではあるが、参加者に“美術館や美術作品と親しむ場”を提供できていれば幸いである。

※1:「こんには美術館事業」とは、「展示室へ誘い、作品や美術に対する理解を深める」「美術館の機能や役割に対する理解を促す」ことを目的として実施している当館の教育普及事業の一つである。

※2:「アート・トラベリング・トランク」とは、平成22年度に文化庁並びに美連協からの助成で開発した「美術館コレクション活用素材BOX」である。

【主任学芸員(教育普及担当)岡本裕子】

ボランティア活動 五味太郎作品展 よみきかせと「らくがき絵本」報告

「五味太郎作品展【絵本の時間】」の関連事業として、当館ボランティアによる絵本のよみきかせと「らくがき絵本」ワークショップを開催しました。本展には子どもたちにも多数ご来館頂き、週末は元気あふれるワークショップとなりました。「らくがき絵本」とは、五味先生の絵が一部入ったシートに続きを描くというもの。五味先生のちょっとしたヒントで絵を描く楽しさが広がります。どんどん描き進める子どもたちの想像力にスタッフはみな驚かされました。よみきかせでは、スタッフ達も、声のトーンや読むスピードなど工夫しながら練習した結果、よみ手の個性を生かしたよみきかせとなり、絵本の世界が豊かに広がりました。「子どもたちから元気をもらえる」というスタッフ達は少し緊張しながらも、来館者の皆様と一緒に絵本の世界を楽しむことができました。

【学芸員 白神由里子】



美術の本 富岡多恵子『写真の時代』

毎日新聞社(1979年)／筑摩書房(1991年)

富岡多恵子は詩人、小説家そして評論家、随筆家として知られているが、雑誌『カメラ毎日』に、1976年6月から1978年5月まで、2年間にわたって連載されたのが本評論集である。24回に渡ったため、表題は毎回異なる。レニ・リーフェンシュタール(1902―2003)の、『カウのヌバ』というスーダンの民族を撮影した写真集について、ベルリン五輪の記録映画監督など、戦前からの略歴を追って説明する。「美しいけれどもおそろしい写真」と形容している。男たちが闘う場面には、造形感覚があって、心理的なドラマはないが、これは五輪映画の撮影と同様であると指摘する。文明から離れたところに生きるとされる民族を、美しいとする考え方にも、最後に疑問を投げかける。また須田一政(1940―)の『風姿花伝』については、「人間がかくす暗闇、ハレ姿を写すことで日常の闇があらわされている」ことを、そしてカメラ雑誌に掲載される、読者のコンテスト写真が、年を経て「思いがけないものはない」ことを述べる。

作家は写真の専門家でないため、述語を用いずに、自らの感性で様々な表題に切り込むところが、読者としては面白い。毎日新聞社刊行本には、東松照明との対談が巻末に掲載されている。

【学芸員 廣瀬就久】



毎日新聞社刊行本



筑摩書房刊行本